

# 日本植民地期韓国経学院の積奠祭について

丁 世 絃

## Confucian Ceremony in Korea's Keigakuin during the Japanese Colonial Period

JEONG Sehyeon

Sungkyunkwan, established in 1289, was Korea's preeminent educational institution in the Choson Dynasty (1392-1910). Confucian ceremony in Sungkyunkwan, officiated by the kings personally, were the most authoritative in the country. During the Japanese colonial period (1910-1945), Keigakuin grew out of Sungkyunkwan and became the central institution of Confucianism which was in charge of all the regional schools and academies. Confucian ceremony continued in Keigakuin but was held differently from that in Sungkyunkwan. This thesis examines the ceremonial changes by comparing Confucian ceremonies in Sungkyunkwan with those in Keigakuin, and explores the conflicts between Korean literati and the Japanese colonial government on the ceremonial issue as well as the importance of Confucian ceremony during the Japanese colonial period.

キーワード：積奠 経学院 近代儒教 儒教儀礼

### はじめに

経学院は1911年6月15日、朝鮮総督府令第73号によって明治天皇の25万円を基金とし、経学院規定を備え、成均館のあった場所に設立された<sup>1)</sup>。設立の目的は経学を講じ、風教徳化を裨補することであった<sup>2)</sup>。経学院の前身は朝鮮最高学府であった成均館である。朝鮮総督府体制が始まってから、それまで成均館が持っていた教育的機能はほとんど排除され、学務局に所属し儒教思想にもとづく社会教化機関となる。

経学院の事業は積奠祭、講演会、『経学院雑誌』の三つであった。その三つの事業の中でも積奠祭は最も重要な行事であった<sup>3)</sup>。

---

1) 『経学院雑誌』 1号（経学院、1913年）41頁。

2) 『経学院雑誌』 1号（経学院、1913年）44頁。

3) 『経学院書類』（内務局社会課、1920年-1927年）93頁。

本稿では次の四点を念頭に置いて考察を進めたい。

一、経学院は朝鮮王朝時代の最高学府であった成均館の後身である。成均館での積奠は最も権威がある祭祀であり地方の書院や郷校の模範となる積奠の典型であった。

成均館が行なった国家単位の積奠祭は植民地時期経学院によって継承されたため、日本植民地期の中央（経学院）と地方（郷校・書院）の積奠およびその影響力と相互関係を研究するためには、まず中央の積奠の研究が必要である。

二、日本植民地期における積奠祭は儀礼の形式的変化や以前にはなかった儀式が現われるなど変化が生じる。このような積奠の変化の検討・整理とともに、朝鮮総督府と儒林の対立・調整に関する考察も行なう。

三、上記に関連し、積奠の変化と朝鮮総督府の政策との関連性を明らかにする。特に1930年代中期以後、心田開発政策が経学院の積奠にどのような影響を与えたのか、朝鮮総督府が求めたのは何であったのかに注目したい。

四、経学院における積奠の重要性を解明する。積奠は経学院の重要な業務であり、植民地期韓国の儒教界における経学院積奠がもつ意味を考察したい。

## 一 韓国における積奠祭の歴史と特徴

### 1 韓国の積奠祭の概略

韓国は中国と地域的に近いため、比較的早い時期から儒教や教育制度を受け入れた。高句麗時代には太学が、百済には五経博士制度があったため積奠も早い時期から導入されたと推測されるが、三国時代までの文献には積奠に関する記録を見出すことができない。

高麗成宗2年（983）、任成老が宋から孔子廟図、祭器図、『七十二賢賛記』をたずさえて成宗に上呈した<sup>4)</sup>。睿宗9年（1114）6月には使臣安稷崇が帰国する際、宋の徽宗が新楽器、楽譜、指訣図を贈ったという<sup>5)</sup>。

韓国における文廟設置の記事は高麗顯宗11年（1020）に現われる。宣宗8年（1091）9月には国学の壁上に七十二賢像を描いて奉祀し、肅宗6年（1101）、文宣王殿の左右に六十一子と二十一賢を新たに描き、積奠の際に配享している<sup>6)</sup>。

韓国の文廟の特徴としては自国の学者を配享することがある。高麗顯宗11年、新羅時代の人物である崔致遠（857-?）を従祀し、13年（1022）には薛聰（655-?）<sup>7)</sup>を配享したのである。仁宗5年（1127）には諸州に学校を建て、文廟も設立した。それは韓国の地方文廟とその積奠の始まりであった<sup>8)</sup>。

朝鮮王朝（1392-1910）の最初の積奠記事は朝鮮太祖元年（1392）8月8日の記録であって「芸文春秋

4) 「世家」3巻（『高麗史』、成宗2年5月甲子條）。

5) 張在天「朝鮮朝 成均館 釋奠祭禮의 社會敎化的 性格」（『韓國思想斗文化』第13輯、2001年）322-323頁。

6) 徐信錫「15世紀成均館의 機能研究」（『東アジア文化研究』、韓陽大学東アジア文化研究所、1982年）。

7) 薛聰の生没年は確かでないが、ここでは『韓國民族文化大百科』を参考にした。

8) 權五興『儒教と釋奠』（成均館、2004年）77-78頁。

館の大学士閔霽に文廟で積奠を行なうことを命じた」と記録されている<sup>9)</sup>。太祖は1392年7月17日に即位したから、この8月8日の積奠が朝鮮王朝の最初の積奠祭になる。だがそれはソウルに遷都する以前であって、積奠祭が行われた場所は高麗の首都、開城であった。

朝鮮太祖7年（1398）、ソウルの崇教坊に成均館を設置し、正殿（大成殿）を建てるとともに、東廡・西廡に孔子、四聖、十哲と宋朝六賢など二十一位と韓国の名賢三位、中国の儒賢九十四位など全百八十位を奉安し、毎年仲月（旧暦2月と8月）の上丁日に積奠祭を行なった<sup>10)</sup>。

朝鮮時代の積奠は初献官を誰がつとめるかによって国王親行積奠、王世子積奠、有司積奠の三つに分けられる。国王が初献官になると、亜献官は王世子、終献官は領議政がつとめた。

## 2 韓国積奠の特徴と機能

朝鮮の積奠祭の特徴としては啓聖祠と東国十八賢の配享を挙げることができる。まず啓聖祠は宣祖7年（1574）、質正官を中国に派遣し、規模や様式等を調査させた。その後、戦争や凶年が続いて保留となったが、肅宗25年（1699）に啓聖祠を建立し始め、肅宗27年（1701）に竣工した<sup>11)</sup>。啓聖祠には、孔子の父である叔梁紇を始め五聖（孔子、顔子、曾子、子思、孟子）の父を奉安し、積奠の前日の夜に祭祀を行なった。

第二の特徴は文廟に東国十八賢という自国の聖賢を配享したことである。朝鮮王朝実録を見ると文廟配享の問題をめぐって頻繁に上疏があり、英祖22年（1746）の記事に十二賢に関する記録が見えるので、東国十二賢体制になったのはそれ以前であると推測できる<sup>12)</sup>。また英祖32年に文正公宋浚吉（1606-1672）、英祖40年に朴世采（1631-1695）、正祖20年（1796）には文正公金麟厚（1510-1560）が正祖32年文正公宋時烈（1607-1689）が配享されまた、高宗20年に（1883）文烈公趙憲（1544-1592）と文敬公金集（1574-1656）が配享されて東国十八賢体制が整った<sup>13)</sup>。

以下の文章は成均館の儒生が文成公李珥と文簡公成渾の尊祀することを建議する上疏である。

自古有國、必立學宮以教育人才、而又必祀聖賢於其中、蓋以聖賢道德、爲萬世斯人之標準、凡有秉彝之性者、皆所宗仰、故有國家者、未始不尊奉之、而爲教之道、又必以聖賢爲準則、故祀之於學宮、使多士爲師法也。夫聖人之道、乃人倫之極、而天理之至也、故爲萬世之標準也。聖人雖沒、而其言與事、載在方冊、垂之萬世。後之人有能讀其書、而求其理、以聖人爲法、而有所發明、則斯可謂得聖人之傳、而可以爲法於世矣<sup>14)</sup>。

9) 「太祖」1巻、(『朝鮮王朝実録』、1392壬申8月8日)。

10) 權五興『儒教と釋奠』（成均館、2004年）78頁。

11) 閔鍾頭『国訳太学志』（成均館、1994年）969-970頁。

12) 十二賢とは新羅の薛聰・崔致遠・高麗の安珣・鄭夢周・朝鮮の金宏弼・鄭汝昌・趙光祖・李彦迪・李滉・李珥・成渾・金長生を指す。

13) 權五興『儒教と釋奠』（成均館、2004年）28-38頁。

14) 「孝宗」2巻（『朝鮮王朝実録』、1649年11月23日）。

ここでは学宮を設立し、聖賢の祭祀を行なうのは聖賢の徳を万世の標準とすることであると述べている。このように朝鮮時代において文廟での祭祀は儒教儀式による教化的性格を持っていること、またそれに対して十分認識がなされていたことがわかる。

成均館や地方の郷校で行なわれた積奠祭では、祭物などの徴収や文廟配享をめぐる儒林の分裂問題も起こったが、学問の奨励、儒教理念を通しての教化、儒林の団結や統制などの機能も持っていた。

## 二 経学院の積奠の変化——成均館の積奠との比較

### 1 積奠次第の比較

上述したように経学院は1911年6月に設立された。日韓合併以後、成均館の名で行なわれた最後の積奠は1911年3月8日の積奠であった<sup>15)</sup>。『経学院雑誌』に初めて記録される積奠祭は1911年9月11日午後8時の秋期積奠である。積奠祭は成均館から経学院になる過程で廃止されることなく、積奠を主管する機関名だけが経学院に変更され、その行事が引き継がれたのである。

しかし、経学院積奠の次第と『太学誌』に見える成均館の積奠の順序を比較してみると相当省略されていることがわかる。最も完備した朝鮮王朝時代の「積奠視学」の儀礼とそれより次第が少し簡単な「王世子積奠」や「有司積奠」の儀礼を検討すると、祭祀を行なう人の身分により式次第は簡略化されているが、大きい違いはない。

〈朝鮮王朝時代における積奠儀礼の比較〉<sup>16)</sup>

	積奠視学	王世子積奠	有司積奠	共通
1	時日	○	○	○
2	齋戒	○	○	○
3	齋官	×	×	-
4	陳設	○	○	○
5	傳香祝	×	○	-
6	車駕出宮	○	×	-
7	省牲	○	○	○
8	肆儀	○	×	-
9	奠幣	○	○	○
10	饋享	×	×	-
11	初獻	○	○	○
12	亜獻	○	○	○
13	終獻	○	○	○
14	飲福	○	○	○
15	撤籩豆	○	○	○
16	望座	○	○	○
17	視学	×	×	-
18	車駕還宮	×	×	-

15) 『経学院雑書類綴』(社会教育、1915-21年) 333頁。

16) 閔鍾頭『国訳太学志』上(成均館、1994年) 291-346頁を参考にして作成。

一方、経学院での積奠儀式の次第は①就位、②四拝、③奠幣礼、④初献礼、⑤亜献礼、⑥終献礼、⑦分献礼、⑧飲福礼、⑨添香礼、⑩四拝、⑪徹籩豆、⑫四拝、⑬望瘞、⑭礼畢であった<sup>17)</sup>。

成均館と経学院積奠の手順の最も大きな違いは、経学院積奠の場合は当日行なう儀式だけが記されていることである。成均館「積奠視学」の場合、⑧の肆儀までが積奠祭の前日までに準備することになっており、それに比べて簡単な形式になっているのである。

経学院積奠にはある①「就位」、②と⑩の「四拝」、および⑦「分献礼」が成均館の式次第に見えない。これは、成均館の積奠では独立した式次第として「就位」、「四拝」を記さなかったままで、「分献礼」もまた「終献礼」の中に含まれていた。ただし、⑨添香礼は成均館積奠にはなかった新しい形式であった。これについては次章で考察を行なうこととする。

## 2 積奠日時の変化

朝鮮時代の積奠日は仲月（旧暦2月と8月）の上丁日であったが、併合以後、朝鮮総督府は旧暦から陽暦にすることを勧めた。それは経学院が設立される直前、成均館が経学院になる過渡期のことであった。だが儒林がこれに反対し、地方の郷校からも反発があったため、積奠は朝鮮時代のまま旧暦の日付で行なわれるようになった<sup>18)</sup>。

このように、日付は1937年以前まではもとの旧暦2月と8月の上丁日であったが、時間は早めに変更された。18世紀の正祖代の積奠は午後11時30分頃に準備が始まり、四更一點（午前1時半ごろ）に儀式が始まった。そして五更三點（午前4時ごろ）に礼が終わったと記録されている<sup>19)</sup>。かなり長い儀式であったが、経学院体制になってからは、式が始まる時間も積奠全体に要する時間も変更された。

其儀式ハ前夜ヨリ始メテ徹宵翌日ニ至ルヲ本体トスレトモ實際ハ前夜七時過ヨリ始メテ十二時前ニ終ルヲ例トス<sup>20)</sup>

経学院が設立される直前、積奠祭の開始時間と所要時間に関して朝鮮総督府の学務局でも議論があったと思われる。朝鮮時代と同様にすることはできなかったので折衷案として夜7時から午前12時までほぼ5時間の儀式を計画した。

しかし実際の積奠の開始時間は、経学院になって初めて行なわれた第1回積奠（1911年9月23日の秋季積奠）と、第2回積奠（1912年3月21日の春季積奠）だけが午後8時であったが<sup>21)</sup>、それ以後は午前中に行なうことになった。1912年9月18日の積奠からは午前10時に開始時間が変更される<sup>22)</sup>。

経学院で積奠と講演会を同日に実施したのは、第8回積奠の時からであった。資料によると第8回積

17) 注16所掲の『国訳大学志』上、91頁。

18) 『成均館郷校及客舎に関する書類』（朝鮮総督府、1911年）253頁。

19) 李敏弘「文廟의 積奠大祭와 太學生의 津宮生活」（『大東漢文学』第21輯、2004年）319-320頁。

20) 『経学院亨祀関係書類』（内務部学務局、1911-1913年）

21) 『経学院雑誌』1号（経学院、1913年）46-47頁。

22) 『経学院雑誌』1号（経学院、1913年）51頁。

奠（1915年3月17日）は午前10時に始まり、11時45分に終わった<sup>23)</sup>。よって講演会は昼食以降になった。積奠と講演会を同日に企画したのは積奠に集まった多くの人を講演会に参加させるためであったと推測される。厳粛な雰囲気の中で行なわれる積奠を見たあと社会教化的内容を骨子とする講演を聴くのは民衆の教化に当然効果があったと思われる。

そのためには積奠と講演会の間に時間的間隙があってはならなかった。そこで第9回積奠（1915年9月13日）では、積奠の時間を午前9時に変更し、講演会を10時30分から始めることにした<sup>24)</sup>。

次に地方の郷校における積奠の時間を見てみよう。『経学院雑誌』第14号の地方報告欄によると、開城郡、淮陽郡の春季積奠の開始時間は午前9時であり、安城郡の場合は午前1時、また平壤府は午前8時、牙山郡は午後9時、平昌郡は午後8時にそれぞれ儀式を行っていた<sup>25)</sup>。

安城郡のように朝鮮時代からの積奠の時間をそのまま固守した地域もあったが、経学院の積奠の時間に合わせて午前9時に行なう地方もあるなど、それぞれの事情と便宜に合わせて礼式の時間が調節された。これは、朝鮮総督府から経学院に、そして地方の郷校に一方的な上命下達の関係が形成されていただけではなく、全体的な枠組みの中である程度自律的運営が可能であったことを示している。

積奠全体の所要時間は、第8回積奠の場合、午前10時に始まり、儀式が終わったのが午前11時45分であった。朝鮮時代と比べてみるとかなり時間が短くなったと言えるが、第9回積奠からはもっと短くなり、1時間10分程度で儀式全体が終わるようになった。このほか次に示すように、積奠日付の変更が1回だけだったのに比べ、開始時間は6回も変更された。

〈積奠時間の変更〉<sup>26)</sup>

積奠回数	日付	積奠開始時間
第1回	1911年9月23日	午後8時
第3回	1912年2月3日	午前10時
第9回	1915年9月13日	午前9時
第37回	1929年9月9日	午前10時
第50回	1936年2月25日	午前11時
第51回	1936年9月22日	午前10時

### 3 神位図の変化

前にも少し触れたように、朝鮮の文廟積奠の特徴としては東国十八賢を配享したことを挙げるができる。これは中国文化であった積奠祭を朝鮮化したものであった。

『太学誌』掲載の享祀図を見ると新羅、高麗、朝鮮の人物18人が配享されている<sup>27)</sup>。しかし『経学院雑誌』第2号には、大成殿の神位図しか見えない。大成殿の神位図は、孔子をはじめとする中国の歴代儒

23) 『経学院雑誌』7号（経学院、1915年）38頁。

24) 『経学院雑誌』9号（経学院、1915年）38頁。

25) 『経学院雑誌』14号（経学院、1917年）59-65頁。

26) 『経学院雑誌』1-48号（経学院、1913-1943年）を参考にして作成。

27) 閔鍾頭『国訳太学志』（成均館、1994年）56-57頁。

者だけである。東西、両廡及啓聖詞に対する朝鮮総督府の方針は次のようなものであった。

元成均館ノ時代ニハ文廟春秋積奠ノ時ハ東西、両廡及啓聖詞ヘモ共ニ亭祀セシガ日韓併合後ヨリハ大聖展ヘノミ亭祀シ東西、両廡及啓聖詞ヘハ之ヲ廢シ今日ニ至リ<sup>28)</sup>

「亭祀釐正に関する件」には次のような記録がある。

朝鮮ニヲケル祭祀の規式ハ漸次内地ノ制規し移せて風習同化シ促進スル一助ト為スノ要あり<sup>29)</sup>

これは経学院の制度が日本（内地）と違う場合はそれを変更するということである。結局経学院の設立以後、東国十八賢と五聖の父の配享はいったん廃止されたのである。1920年9月16日の積奠祭後、一般の参加者が焼香再拝するとき、儒林団体である「人道公議所」の人々が「啓聖祠で祭祀をするので門を開けてほしい」と要求したが、経学院の職員は「啓聖祠では一般の士は祭祀をすることができない」と断った。しかし人道公議所の人々は諦めることなく抵抗したという<sup>30)</sup>。

これ以後、1921年1月20日、1922年3月30日に経学院が総督府に二回建議し<sup>31)</sup>、1922年からは、以前のように東廡と西廡また啓聖祠での祭祀も復活することになった。

#### 4 焚香礼に関する考察

焚香礼は大聖展および東廡と西廡で毎月の朔望に線香を焚いて孔子の徳をたたえる行事であった。『太学志』には「毎月大司成は平常服で館官及び齋任・生進・四学の齋生を引率し文廟で焚香する」と記録されている<sup>32)</sup>。

この礼式は当初、経学院では行なわれなかった。祭祀や様々な経学院の行事は『経学院雑誌』の「日誌大要」に記録されているが、焚香礼に関する記事はしばらくの間見えない。焚香礼の復活が決まったのは1937年8月9日のことであった。

- 一 各文廟明倫堂ニ於テハ来ル十五日ヲ前後ニ一般儒林ヲ対象トスル時局認識並ニ統後ノ覚悟ヲ徹底セシムル趣旨ノ講演会ヲ開催スルコト
- 二 毎月一日十五日ノ展拝ニ際シテハ各文廟ノ位前ニ於テ焚香後別紙誓願文ヲ誓告スルコト（年月日ハ最初ノ誓願日ヲ記入シ爾後同文トス）
- 三 本府及道府郡島主催ノ時局講演会ニハ一般儒林ハ務メテ出席聴講スルコト<sup>33)</sup>

28) 『経学院雑書類綴』（社会教育、1915-21年）287頁。

29) 『経学院亭祀関係書類』（内務部学務局、1911-1913年）500頁。

30) 「積奠祭に一風波」（『東亜日報』、1920年9月20日記事）。

31) 『経学院雑誌』22号、23号（経学院、1921年、1922年）。

32) 閔鍾顕『国訳太学志』（成均館、1994年）345頁。

33) 『経学院雑誌』42号（経学院、1937年）32頁。

この記録は『経学院雑誌』第43号に見え、「全（1937年）八月十五日午前七時経学院明倫学院職員及在京城講士学生이参集하여文廟焚香礼을行하고北支事変에對する誓願文을誓告하다」<sup>34)</sup>と記されている。文廟焚香礼はこれ以後毎月1日、15日に行なわれ、焚香礼に続いては誓願文を奉読する誓願式が行なわれた。

### 三 経学院積奠の新たな様相

#### 1 積奠の一般公開とその意味

経学院積奠の最も大きな変化は積奠の一般公開であった。朝鮮時代の積奠は王のほか成均館や郷校などの儒林、国家官僚、成均館の儒生など特定の士大夫のみの行事であったが、風教徳化を裨補するという経学院の設立趣旨に従い、積奠は儒教精神の涵養を目標として一般公開されるようになったと思われる。

その参加階層を見ると、朝鮮総督をはじめ、各層の高位官各公私立学校の教員と生徒、「大同斯文会」、「儒道振興会」、「人道公議所」といった儒教関連の団体などが参加していた。

積奠祭の公開は閉鎖的儒教祭祀から脱皮し、民衆に儒教儀礼に参加する機会を提供するとともに、積奠の終了後に行なわれる講演会の参加人員を確保するという側面もあった。

朝鮮王朝時代には身分の制限があったため、一般人には積奠のような国家の祭祀に参加するのはもちろん、これを見ることさえできなかった。このような状況があったため積奠祭に対する一般人の関心は高かった。第1回積奠の参加者は700余人、夜8時の晩い時間に行なわれたが、参加者は多かった。参加者が一番多かったのは1941年第60回積奠で、5680人が参加したと記録されている<sup>35)</sup>。

当時は今のようないマスメディアがなかった。1937年当時のラジオ普及率はわずか40,257台であったという<sup>36)</sup>。積奠祭は京城だけではなく各地域の郷校や書院でも同じ日に行なわれたことを勘案すると、積奠祭の社会的影響力を推測することができる。

#### 2 積奠後の講演会、茶菓会、宴会

経学院における積奠の重要性は積奠を中心に経学院の重要行事が配されているという点によっても確認することができる。

『経学院雑誌』には、毎回の積奠のほか、積奠後に行なわれた講演会、茶菓会やその場所、総督訓話内容も記録されている。上述したように講演会は当初、積奠の翌日に開かれていたが、1915年の春季積奠からは積奠祭の直後に行なわれるようになった。

第2回積奠（1912年3月21日）からは茶菓会の記録が加わる。茶菓はおおむね総督が担当したが、総督が積奠に参加できなかった場合は代理人として政務総監がこれを担当した。参加者は経学院の講士や

34) 『経学院雑誌』43号（経学院、1938年）37頁。

35) 『経学院雑誌』46号（経学院、1941年）18頁。

36) 宮田節子「朝鮮民衆の日中戦争観」（『朝鮮民衆と「皇民化」政策』、未来社、1997年）13頁。



職員であった。

第2回積奠までは夜8時に式が始まったため茶菓は翌日に行なわれた。場所は1919年以前は朝鮮総督の官邸であるが、経学院の場合もある。

第16回積奠（1919年3月6日）以後は京城ホテルや明月館、永興館などでの宴会の記録が見える。これは1919年3月1日に起こった韓国の独立運動（3・1運動）の影響があったとも考えられる。その時大提学、副提学がこの運動に参加したため総督府では儒林が動揺しないように安定させる必要があったと思われる。

これ以外にもたとえば第10回積奠（1916年3月11日）の翌日には懇話会があり、懇話会の翌日には総督官邸で茶菓会があった。その中で経学院講師に対する総督の訓話があった。茶菓あるいは懇話会では訓示や講師に対する注意事項などがあった。経学院の講師は講演の仕事が多かったため、茶菓会などの機会に朝鮮総督府の立場や状況を彼らに伝えたものと思われる。

### 3 植民地期の新たな積奠の儀礼——「添香礼」

経学院積奠には『太学誌』、『朝鮮王朝実録』にも見えない儀式が登場している。それが「添香礼」であった。「添香礼」は次のように説明されている。

執事ノ案内ニ依リ大聖孔子神位香卓ノ前ニ進ミテ鞠躬（敬礼）シ香ヲ三タヒ上ケタル後少シク退キテ再ヒ鞠躬シ元ノ位に復スヘシ<sup>37)</sup>

この説明によると「添香礼」は成均館の積奠「奠幣礼」の中に含まれていた「三上香」に近いが、「三上香」が「奠幣礼」の中の儀式なのに対し、「添香礼」は別箇の儀式になっている。また成均館の三上香は積奠の初献官が行なった礼であったが、1916年3月11日に行なった春期積奠の「添香礼」には、なんと45人も参加している。資料にある「添香礼」への参加順序は次のようである。

一、朝鮮総督（又は代理） 二、親任官及同待遇 三、勅任官及同待遇 四、奏任官及同待遇 五、経学院講師（地方順ニ依ル） 六、一般参拝人体表者（初献官ノ許ヲ承クヘシ）<sup>38)</sup>

これにより、「添香礼」の性格をはっきりと理解することができる。特に目立つのは最初の「添香礼」を行なうのが朝鮮総督であるという点であり、経学院、朝鮮総督府の関係者ではなくても積奠祭に参加することができるという点も興味深い。さらに「添香礼」に関する1920年9月17日の東亜日報の記事記録には次のようにある。

飲福礼を終わらせて斉藤総督が神位に上がって添香礼を行った。柴田学務局長以下京畿道知事、京

37) 『朝鮮京城文廟釋奠志』（孔子祭典會、1919年）6頁。

38) 『朝鮮京城文廟釋奠志』（孔子祭典會、1919年）6頁。

城府尹が続いて添香をし、高等官以上の官が添香をした後参列者一同が四拝をして盛大な儀式を終わらせた。当日参加した人は京城普通学校女子高等普通学校、於義洞普通私立高等商業学校の生徒が参加し、約350名に達した<sup>39)</sup>。

上記の積奠は前日の9月16日に行なわれた。儀式の参加者は朝鮮総督および高等官以上の官、そして学校の学生たちであった。「添香礼」のあと参列者一同が四拝を行ない式が終わるといふ。一般参加者の目には、高級官僚たちが次々線香を焚く風景が積奠の最後を飾る儀式として権威がきわめて高いものと映ったのであろう。また興味深いのは、韓国では、現在も「添香礼」を行っている郷校があるということである<sup>40)</sup>。

#### 4 教科書に見える積奠

1920年代の教科書には経学院の積奠という内容が現われる。次は近代の女性雑誌『新女性』1924年10月号に掲載された文章である。

高等科三年の朝鮮語時間であったので40余人の生徒が本を持っていて静かに先生の説明を聞いていました。習っているのは二十何課の「経学院の積奠」という課であって、有名な成義敬先生が正楽、雅楽など朝鮮の古楽やら唐時代の衣服の様子まで黒板に描きながら説明するのが優しかった<sup>41)</sup>。

この文章は女子高等学校の女子学生が「経学院の積奠」を学んでいる風景である。この雑誌は女子高等学校を訪問して授業参観し、学校・寮の風景を観察してその内容を掲載したものである。

学生たちが朝鮮語の授業時間に学んでいたのは『女子高等朝鮮語読本』の「経学院の積奠」という内容である。また『新編高等朝鮮語及漢文』にも「経学院積奠」という内容があった。その内容は題目が示しているように「大成殿」で積奠を行なう手順や様子の詳細な描写であった<sup>42)</sup>。

積奠の手順、衣服、礼器、楽器など近代の学生とは関係がないように見えるこうした内容が教科書に載っていたのは興味深いことである。

教科書の題目が示しているように積奠は経学院を代表する行事であった。そして学校、学校の職員、学生と経学院の関係にも注目する必要がある。経学院自体が朝鮮総督府の学務局の所属であったため連携組織として学校との交流は活発であった。特に1920年代には経学院に教育機関がなかったため、積奠

39) 閔鍾頭『国訳太学志』(成均館、1994年) 345頁。

40) 「杆城郷校秋季積奠大祭奉行」(2011年10月05日32号『江原高城新聞』)によると、杆城郷校が主催した秋期積奠大祭の奉行儀式が9月28日、邑校洞里に位置した杆城郷校の大成殿で行なわれた。機関団体長と地域の儒林および住民など150人が参加し、開会式に始まり、奠幣、初献、亜献、終献、分献礼、飲福受胙礼、望燎礼、添香礼の順序で進化したという。

41) 윤여탁『국어교육100년사』(서울대학교출판부、2006年) 113頁から引用。

42) 윤여탁『국어교육100년사』(서울대학교출판부、2006年) 113-114頁。

祭の時、成均館時代の祭礼の参観者であった儒生の役割は一般学生が担うようになった。

『経学院雑誌』の「日誌大要」にある積奠祭の記録には参加団体を記しているが、その中で最も多いのは学校団体および儒教団体であった。学生は教科書を通して積奠祭を学ぶとともに、経学院で直接積奠を経験することができたのである。

## 5 1935年以後の積奠改革

経学院に対する政策や方針は1935年代以前と以後に分けて見ることができる。その理由としては1935年から本格化された心田開発運動が挙げられる。心田開発運動は宇垣一成朝鮮総督により提唱されたもので、その目標は1) 国体観念を明徴にすること、2) 敬神崇祖の思想及信仰心を涵養すること、3) 報恩、感謝、自立の精神を養成することの三つであった<sup>43)</sup>。

このような時代の流れと共に積奠祭も大きな変化を迎えることになる。次の表は1938年『経学院雑誌』第43号の「二、文廟積奠改革」を整理したものである<sup>44)</sup>。

従来行事中非時代又は弊習たる事	同上改正行事
1. 積奠祭日程は旧2月8月初丁日	1. 陽4月15日、10月15日
2. 儒林の参拝が稀有	2. 随時参拝する事
3. 執礼中厳粛味が少ない	3. 厳粛に執礼する事
4. 供用祭脯分布	4. 廃止
5. 文廟当宿直無	5. 宿直実施
6. 積奠祭数日前から儒林入校宿泊	6. 禁止
7. 文廟周囲不潔	7. 毎日清潔実施
8. 其他弊習	8. 婚礼式等は明倫堂を利用する事
	9. 其他弊習は断然矯正

積奠の時間の変更はしばしばなされたが日付の変更は一回だけであった。旧暦2月と8月の上丁日に行っていたのが1937年から陽暦の4月15日、10月15日に行なうように改められたのである。

朝鮮総督府は全国の文廟で積奠の時間を陰暦から陽暦に変更した。この時間の変更は「先聖先師に対する祭礼は昔より後生の入学礼を意味の存じたるに徴し春秋積奠期日を4月15日に取定たるは新学年入学の初に於いて学生をして積奠祭に参拝せしめ積奠の意味を闡明すると共に徳育置重の御趣旨に副はしめんと」するためであるという<sup>45)</sup>。

このうち「文廟積奠改革」の弊習の6番目に含まれる齋戒は小祀の場合二日前の儀式で、祭官が「散齋」する場合は「正寝」において、「致齋」する日は「祀所」において寝ることで、体と精神を敬虔にする儀式であった。

43) 青野正明「朝鮮総督府の「心田開発運動」と「類似宗教」強圧政策」（『日本学』第31集、2010年）162頁。

44) 『経学院雑誌』43号（経学院、1938年）。

45) 柳美那「植民地期朝鮮における経学院の研究」（博士論文、早稲田大学、2007年）から引用。（『経学院雑誌』42号、45頁）。

また目立つのは隋時文廟に参拝することである。これは心田開発運動における信仰心の涵養に従うものとして理解することができる。

#### 四 経学院の積奠祭の意味

成均館は教育的機能をほとんど失ったまま、経学院という社会教化を目的とする機関として再編されたが、積奠は日本の植民地期にも廃止されずに持続した。その理由としては近代期日本の儒教主義をあげることができる。日本では明治維新後、聖堂における積奠はしばらく廃止されたが、明治40年(1907)、孔子祭典会を主軸として復活した<sup>46)</sup>。

日本の儒教主義は韓国の統治にもかなりの影響を与えた。儒教に対する否定的な認識があった当時、経学院は日本儒教的な社会教化活動、儒教精神の復興、宗教としての儒教運動などの新傾向と日本の支援に支えられて存続した。

ただ、朝鮮総督府が願ったのは儒教を通じた社会教化であったから、朝鮮王朝の伝統を継承する儒教教育は必要とはされなかった。

朝鮮王朝時代の積奠は、成均館だけではなく地方郷校の文廟でも行なわれたが、成均館は国の最高学府であり、国王の親任積奠が举行されたため、きわめて高い権威をもっていた。そのため積奠は特権層のみが参加する限られた範囲での行事であった。

朝鮮は身分制社会であったため、儒教の差別的祭祀の原理により庶民は孔子という名前は知っていても、祭祀を見ること、行なうことはできなかった。しかし両班であっても積奠に参加できるとは限らなかった。地方における積奠祭も、地方儒林の中で一定の権威が認められた者しか参加できなかったから、積奠の参加者は両班の中でも特定の集団であったといえよう<sup>47)</sup>。つまり朝鮮時代の積奠は特権層だけが参加できる権威ある祭祀であった。

積奠祭は内容的な変化や時間の変更などがあったが、植民地期においても経学院の象徴として存続した。そればかりか、多くの人々の参加を通じて、朝鮮時代よりもさらに活性化した面もあった。

植民地朝鮮統治における経学院の積奠がどのような意味を持っていたのかについては次の文から、その一面を考察することができる。

本日の祭典에多數의儒生이遠近으로集合하여一祭祀을舉行하는趣旨는何處에在한지今에改言할것도無히(中略)昔日儒生은篤學의士로一般人民上에居하여一般世人의尊敬을受하여(中略)然한대現今에及하여야는昔日과如한信望이不振하고只其名目만存함에不過하니此는畢竟儒生其人이聖賢의訓하심을守치아니한結果로茲에至한것으로思料하며又此祭祀를隆盛히行치아니함으로自然히一般人民의聖賢에對한觀念이遠하야目下의狀態를呈함이로다茲에從하야此에祭祀를將來는盛히行하고孔子의訓하신人道를履踐치아니함이不可함(後略)

46) 湯島聖堂略年表 <http://www.seido.or.jp/year.html>

47) 최선혜 「조선전기 재지품관의 제사와 기복 민속의식」(『朝鮮時代史學報』, 2004年) 21-25頁。

大正六年二月二十三日 大塚誠太<sup>48)</sup>

この文章は『経学院雑誌』第14号の地方報告にある平昌郡文廟積奠祭の講演文である。この内容を見ると、積奠祭を隆盛に挙行することは、朝鮮時代と同様に儒生の地位を守るとともに、一般人民に聖賢に対する観念を植えることにつながるという。

積奠祭の隆盛は、儒教儀式の可視化を通して、祭祀に直接参加する儒林の権威と地位を示すと同時に、その祭祀に参加する一般人には、聖賢の祭祀に参加できるという誇りを与えた。このように、積奠祭は儒教儀礼への参加を通して儒教的精神をもつ臣民を養成することを目的としたといえることができる。

一方、経学院の儒林にとっては、身分制度がなくなった現実の中で、積奠祭への参加を通して朝鮮時代まで両班であったみずからのアイデンティティを再確認することができる祭祀であった。

### おわりに

朝鮮時代の成均館は国立教育機関として人材の養成、文廟の祭礼挙行などの機能をもっていた。このうち成均館の文廟祭礼である積奠と焚香礼は学問の祖である孔子をたたえる祭祀であり、祭礼を通して儒教理念を内面化するという目的をもっていた。

その論理は近代日本の儒教主義と一脈相通するものがあり、文廟の祭礼は日本植民地時代にもきわめて強調された。その結果、積奠は一般の民衆にも公開され、そのために時間も変更された。

積奠を中心にして講演会を始めとする付帯行事が実施されたことは朝鮮時代のそれよりも活性化された一面であるといえよう。そればかりか教科書にも「経学院積奠」という内容が登場し、積奠に対する親近感を学生に与えた。学生はまた経学院に行き、教科書で知った積奠を直接経験することもできた。

このようなつながりはただ積奠のみの範囲にとどまらず、積奠を支える儒教主義がその背景にあったと思われる。拡張していく日本は韓国・中国・台湾など東アジアを一つにまとめていく思想が必要であった。西洋の宗教とは違って儒教は思想的、生活倫理的、宗教的面に広がっていたためこれらの地域においても違和感がなかった。

難解な儒教を簡単に経験することができる積奠は、見ること、聞くことができる生きた儒教であった。そして儒林は経学院積奠への参加を通じて両班であった過去の地位を示すとともに儒教伝統を守るといえる誇りを持つことができた。

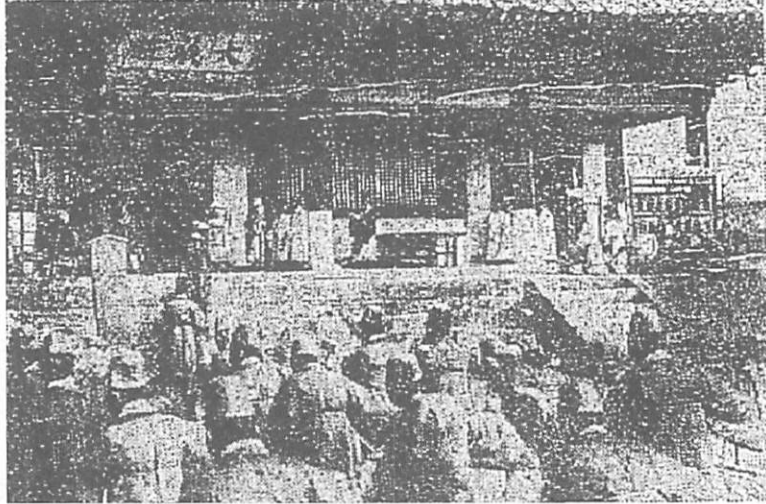
1930年代以前の積奠に関する朝鮮総督府の基本的立場は、積奠祭に多の人を参加させること、そのため午前中にこれを行なうこと、一方、積奠の後、社会教化的内容の講演会を開いて一般人に儒教精神を普及することであった。地方の郷校に対しては積奠祭の開催時間を経学院の時間と同じくするよう強要することはしなかった。

1938年の『経学院雑誌』第43号「文廟積奠改革」の記述から確認できるように、その頃までは日付や積奠祭の準備、儒林の齋戒儀式などは朝鮮時代の例に従って行なわれた。言い換えれば経学院の積奠は

48) 大塚誠太郎「儒生の各位に望む」(『経学院雑誌』14号) 70-72頁。

朝鮮総督府の譲れない点（積奠祭の手順、時間）以外は自律的運用がある程度可能であったのである。

だが戦時体制と心田開発運動が始まってからは、朝鮮総督府の立場もそれまでとは違って積奠の細部にまで関与するようになった。民衆の信仰心の涵養を目的とした一連の運動は経学院にもかなり影響を及ぼしているように思われる。それは以前の儒教精神の涵養とは異なる論理であった。この問題については今後の検討課題としたい。



経学院の積奠祭

(1924年3月9日挙行、『東亜日報』1924年3月10日)